インドネシア：教育——コメント

西野　節男

西村さんは，教育文化省管轄の普通学校における宗教教育，特に教科としてのイスラームの宗教教育に関して小学校教科書の分析をされ，どういう内容を学ぶのかということを示されました。それに関するコメントというわけですが，インドネシアには教育文化省管轄の他に宗教省管轄の教育機関が多くあり，私の方はコメントというよりも，むしろ領域を分担して，宗教省管轄の教育機関，特にポンドック・プサントレンという伝統的な寄宿塾におけるイスラーム教育のありかたを中心にお話したいと思います。それによってインドネシアのイスラーム教育がいくらかでも立体的に捉えられるようになればと思います。

まず，西村さんが話された普通学校のイスラーム教育とポンドック・プサントレンを関連づける一つのキーとして教師の問題について考えてみたいと思います。イスラームの宗教教科書が実際の授業で，どのように教えられるかということは，書かれた内容の分析とは別の問題として捉えなければなりません。その授業を担当する教師の個々の資質と教えかた，学校のカリキュラムと教育活動全体の中でイスラーム教育という科目がどういう位置を占めるのか，あるいは他の教科の内容や教え方との関連もあって，実際にどういう風に教えられ，どう評価されているかをつかむのは容易ではありません。

ところでイスラーム教育を担当する教師というのは，教育文化省管轄の学校で教える教師であっても宗教省の管轄になります。小学校の宗教教育担当教師は，宗教省の所管するＰＧＡ（イスラーム教師養成学校）（注参照）で養成された教師が宗教省の教師として採用されて，教育文化省の学校に配属されて教えるというかたちになります。その教師の教え方に対して，教育学の観点からの批判がありました。その第一が教授姿勢が非常に権威的であるという批判です。実際の授業場面はと言いますと，宗教教育担当教師は，宗教を知識として

教えるのではなく，生徒を良い信徒にするために，教化するという役割をになっております。もちろん，生徒はそれぞれの宗教に分かれて，それぞれの宗教教育を受けるわけですが，教師は，言わば教室の宣教師として生徒たちにその教えを伝えるわけです。教育学の面からは，それが自由な思考や理性の発達を妨げるのではないかという批判がなされるわけです。

ＰＧＡ（イスラーム教師養成学校）でも教育学の関連科目が置かれ，それらを学んでいるのですが，独立後の一時期に，宗教教師の正規の養成が追いつかなかった時期があります。まず，最初は独立後の国民教育制度において宗教教育が正規のカリキュラムに組み込まれた当初の時期，それから1965年の共産党蜂起未遂事件の後，宗教教育の必修的な性格が急に強められた時期で，教師の養成が間に合いませんでした。そのため，緊急に教師を充当する必要から，宗教教師試験（ＵＧＡ）による採用が行われました。こうして採用された教師は，正規の教員養成は受けておりませんで，イスラームの学識は持つのですが，教授学的な備えが欠けていたことは否定できません。確かに批判されるような権威主義的な教え方というのもあったかと思います。しかし，教育学から批判される権威主義的な教授のありかたというのも，イスラーム教育の基本的な要素の一つであるという感も致します。

この権威主義的な教師像のモデルになっておりますのが，伝統的なイスラーム寄宿塾ポンドック・プサントレンにおける教師のあり方です。ポンドック・プサントレンというのは，基本的にはイスラームの高い学識を持ち人々の声望を得た偉い先生の所に，生徒が遠くから集まり，寄宿舎に住み，イスラームの戒律に従って信仰実践に励みつつ，教義を学んでいく場です。イスラーム教育の基礎的なものは，コーラン学習，インドネシア語でプンガジアン・クルアーンといいますが，ポンドック・プサントレンはその段階を終えた子供たちが来て学ぶ場であり，言うならばイスラーム教育の中等・高等レベルにあたります。初等段階に相当するプンガジアン・クルアーンは，西村さんが話された小学校のイスラーム教育に丁度対応するような内容です。コーラン，六信五行（イーマーンとイバーダート），それに道徳（アフラック）を中心にして学びます。

この段階ではコーランと言いましても，解釈というのではなく，開扉の章と，それからジュズアムマと呼ばれるコーランの後ろの方の短い章（３０巻に分けた最後の巻）を読み，かつ暗唱するのが主な目的です。それらの章は礼拝等の時に唱えなければならないもので，イーマーン，イバーダート，アフラックも相互に関連し，イスラーム教徒として日々の生活に必要な知識と実践を身につけていくわけです。

そうした基礎的な学習を終えて，キタブ（教義書）を学ぶところがポンドック・プサントレンです。そこでの生活に関して，近代学校には見られない性格がいくつか指摘されます。なかでも私が面白いと思いますのは，生徒集団による自主的な学習と管理です。プサントレンには上級生から選ばれた一団の人（ポンドック長もしくは委員）が居りまして，それが下級生を指導するという伝統があります。また，生徒の遍歴の伝統と出入りの自由も大きな特徴です。年限や卒業という制度がありませんから，いつでも入っていつでも出ていくことができます。プサントレン自体が個々のキヤイ（主宰者）の学識によって性格づけられるために，幅広く，そして高いレベルの学問を修めるためには生徒は遍歴して学ばなければなりませんでした。また，そうしたシステム，特に出入りが自由ということと関わって，広い範囲で同胞意識が形成されました。同期に一定の課程を修了し卒業したというのではなく，ある特定の時期を共に学んだ者の間の同胞意識です。１年でも，１月でも同じプサントレンで共に過ごした者は同胞と捉えられます。彼らは，故郷に戻ってから，或いは結婚して別の所に住んでも，そうした同胞意識を基盤に協力しあって，それぞれの地域でイスラームの純化・深化のための努力をしていきます。

また，上級生が下級生を教える伝統については，教えることが職業化されていないと言うこともできるかと思います。そのことは，専門教師という職業，そして，その職業を支える教育学とも，ある意味では無縁であるわけです。キヤイはイスラームの高い学識を持ちましたが，教師として優れた者ばかりではなく，教えるのが下手な者も少なくありませんでした。しかし，学習はそのシステムから予想される程には非効率的ではなかったと言われます。ルラー制，

即ち上級生による指導と，仲間集団による相互学習が非効率から救っていたという指摘がなされております。

ところで，そうした上級生による指導と，仲間同士の学習が，どうして可能なのか。それを何が支えているのかということですが，一つにはイスラームの知識の性格が大きく与かっております。コーランの中にイルム（知識）という言葉がしばしば出てきますが，そこでは神が預言者をはじめとする選ばれた人々に「知識」を直接授けるということ，それと同時にそれらの人々に他の人に伝えるという任務を与えたことが示されています。従って，神の正しい知識を何らかの方法で授かった人は預言者に限らず他の人に伝える義務があるというわけです。ですから，プサントレンの生徒にしても，学んだ知識は，それを伝えなければなりません。それが神に対する務めですが，そうした基本的な考えかたというのがあって，プサントレンの学習が支えられております。

さらに，もう一つ，生徒と教師の倫理的関係にも注目すべきかと思います。プサントレンの基本的な倫理書として「タアリム・ムッタアリミン」という小さなキタブがあります。それは，教師と生徒の望ましい関係，そして学習する場合の心構えについて書かれていて，大抵のプサントレンで下級段階で学ぶキタブです。それには次のような一節，即ち「知識を求める者は，師と師の学識を尊敬することなく，知識を得ることはできない。また，そうした得た知識は無用のものたることを肝に命ぜよ。師を敬うとは師に従う以上のことを意味する」という記述があり，さらに，第四代カリフのアリーの言葉，「たとえ一語を私に教えてくれる者に対しても私はその者の奴隷である」という言が引用されています。そこにプサントレンでの教授・学習を成り立たせている倫理的基盤が示され，教師の絶対性・権威的な性格を見てとることができます。

しかし，それゆえに主宰者に対する個人崇拝が強まり，それが２０世紀初めに起こってくるイスラーム近代主義によって批判されることになるわけです。キヤイがクラマッ（超越的な力）を持つと信じ，バラカ（神の恩寵）の源泉としてキヤイを見ます。それが極端になりますと，ムンガジ・アル・バラカ，即ちバラカを得ることだけを目的にムンガジ（学習）するということにさえなっ

てしまいます。話の内容よりも，むしろその学習の場に居て，話をしている先生の声を聞くことに，より大きな意味があると考えるわけです。先の倫理に関するキタブは，ある面ではこうした伝統を継承し強化する役割を果たしてきたとも言えます。

しかし，イスラーム近代主義の影響を受けて，伝統派のプサントレンでも改革が行われてきました。その一つの柱はマドラサと呼ばれる近代学校制度の導入であり，その中で宗教教育と世俗教育をあわせて教えていく方向が取られます。もう一つは教師のあり方に対する批判，即ちカリスマ的なあり方が問題であるということから，新しい理念に基づいた新しい型のさまざまのイスラーム教師養成機関が，ノルマル・イスラム，マドラサ・ムアリミン等名称は異なりますが，各地に設けられました。

時間がないので，この辺で区切らなければならないのですが，最後にポンドック・プサントレンの現在の状況について少しふれておきたいと思います。ポンドック・プサントレンは，現在でもインドネシア全国で6000ヶ所余りあり，大きな影響力を保持しております。生徒数についても，何をプサントレンとするかというカテゴリーの問題，さらに学校やマドラサとの二重在籍の問題があり，正確に把握するのは難しいのですが，宗教省の統計によると90万人以上の生徒が学んでおります。

また，現在では，ポンドック・プサントレンは近代学校制度とは別系統の伝統的な学習の場としてだけでは捉えきれません。ポンドック・プサントレンという寄宿塾の中にマドラサ（イスラーム学校）を設けたり，教育文化省所管のスコラ，即ち普通中学校や普通高校を置いたり，さらに大学を中に設置するところも出てきております。また，プサントレン内の学校に通学生を受け入れるケースもあり，伝統的なイスラーム寄宿塾の概念でよりも，むしろ総合的なイスラーム学園として捉えた方が適切な場合も少なくありません。また，自らは学校制度を導入せずに，伝統的な形態を保っていても，外部の学校との連携を目指す方向も見られます。寄宿生は昼間は外の学校で学び，それ以外の時間をプサントレンで過ごします。それは，イスラーム的な生活を送るための寄宿舎

としての役割に自らを限定するものですが，精神形成に大きな役割を果たすであろうことは否定できません。また，プサントレンに普通学校が置かれる場合，そこでの教科としての宗教教育の位置づけも，一般の普通学校とは全く異なってきます。教師も生徒もイスラームに深く基礎づけられており，ここでは，先に見たようなイスラーム教師の教授姿勢に対しての批判や風当たりは見られません。イスラームの宗教教育に対して権威主義的だという批判に対して，こちらは教育全体をイスラーム化する方向を目指すものと言えます。

イスラームを取り巻く社会状況の急激な変化の中で，イスラーム教徒はそれにいかに対処すべきかという難しい課題に直面しております。教育についても科学技術の進歩を単に取り入れるのではなく，それをイスラームの元に「一化する（タウヒード）」（一とすること，ここでは宗教と世俗という知識の二分法の克服）という課題を抱えておりますが，それがイスラーム教徒自身の主体的かつ創造的な努力にかかっていることは言うまでもありません。そして，その努力に関わって極めて重要な役割を果たすのも教育だと言えるのではないかと思います。インドネシアのイスラームのあり方も，イスラーム教育の発展とともに明らかに変化しつつありますが，この点についてはまた別の機会に譲りたいと思います。

＊（注）初等教員の養成については後期中等段階で３年間の養成が行われてきたが，緊急の教員需要がほぼ満たされたため，高等教育段階に引き上げられることになった。そのため，現在，ＰＧＡはＭＡＮ（国立イスラーム高等学校）に転換されつつある。なお，宗教省の中等教員については，以前からＩＡＩＮ（国立イスラーム専門大学）で養成が行われている。